

哲学カフェを企てる、パブリック・エンゲージメントの試み — 公的問題を引き受ける公共性の涵養を目指して —

森 本 誠 一

1. はじめに

本論文の目的は、市民性や公共性の涵養に役立つものとして語られる哲学カフェに反省を加え、そうした性質を涵養するためには既存の哲学カフェにただ参加するだけでなく、新たな哲学カフェ、新たな公共的対話の場を自ら企て、作り出していくことが重要であると論じることにある。新たな公共的対話の場を企てていくための手段として、本論文ではパブリック・エンゲージメントという概念を紹介したい。

以上の目的に従って、本論文は次のように進められる。まず、次節で哲学カフェがどのようなものなのかを概観する。日本における哲学カフェの特徴を際立たせるため、哲学カフェ発祥の地とされるフランス・パリのカフェ・デ・ファールで行われている哲学カフェを対比的に取り上げる。続く第3節では、哲学カフェの意義について考察するなかで、哲学カフェが市民性や公共性といった性質の涵養につながるという議論をいくつか紹介し、それらを批判的に検討する。第4節では「公衆・公共への関与」を意味するパブリック・エンゲージメントという概念を導入し、第5節ではそれに基づいて新たな哲学カフェを企てる意義を提示する。最後にパブリック・エンゲージメントの課題を分析して示す。

それではまず哲学カフェがどのようなものなのか見ていこう。

2. 哲学カフェとは

哲学カフェとは何か。この問いに答えるのは非常に難しい。哲学とは何かと問うことが、哲学的な問いであるとか、あるいは哲学をすることであるとか言

われるように、哲学カフェとは何かという問いそのものが哲学カフェのテーマになりそうなものである。それでは哲学カフェにはテーマがあるのかと問われれば、テーマが決まらないまま終わってしまう哲学カフェもあるため、絶対にそうだとは言い切れない。とはいえ「始まりと終わりがある」というだけでは、哲学カフェが何であるのかを規定するのにまったく役立たないだろう。哲学カフェの説明が困難なのは、それだけ哲学カフェが多種多様であるということの裏返しなのである。結局のところ、哲学カフェと銘打って人々が集まり一定の時間話をすれば、それだけでもう哲学カフェと言ってもよいだろう。ただし、哲学カフェがフランスで始まったときには、哲学カフェと銘打つことすらなかったのである。

哲学カフェの起源としてしばしば言及されるのは、1992年6月にパリのカフェ・デ・ファールという喫茶店で期せずして始まった哲学者マルク・ソーテとそこへ集まって来た人々による議論である。ソーテによれば、そのときの経緯はこうである。彼が開設していた哲学相談所の様子を毎週日曜日にカフェ・デ・ファールで仲間たちに報告しているとラジオ番組で紹介したところ、それを聴いたリスナーたちが日曜日にこのカフェへ行けば哲学者と議論ができると誤解したのだという¹。哲学者と必ずしも哲学を専門にするのではない人々とのあいだで起こったこの議論は、その後も継続して行われるようになり、ソーテが1998年に51歳という若さで亡くなったあとも続いている。

以上のような経緯からなのか、カフェ・デ・ファールでの哲学カフェは、アニマトール (animateur)²と当日集まってきた参加者たちとのあいだで交わされる議論が中心のようである。テーマについては日本で行われている哲学カフェとは対照的に、具体的な社会問題が多く取り上げられるという³。バスターイク広場の一角にあるこのカフェでは、喧騒の中、マイクを使って哲学カフェが進行する。

それでは日本の哲学カフェはどのようなものなのだろうか。一概に言うこと

¹ ソーテ 27-8 頁、cf. 越門 35-6 頁。

² 日本の哲学カフェでいえば進行役に該当するような立場。

³ 越門 36-7 頁。

はできないが、日本の哲学カフェでは、通常、進行役ないしファシリテーターと呼ばれる者がいる。その役割も三者三様で、フランスのアニマトゥールのよう
に議論の中心的存在になるということとはめったになく、参加者同士の議論を
交通整理したり、誰が話すのかを指名したりする程度の役割であることがほと
んどである。進行役、ファシリテーターが参加者の発言をホワイトボードや黒
板に板書してまとめるような哲学カフェもあれば、そのような整理をしない
哲学カフェもあるし、進行役や主催者（主宰者）⁴がテーマをあらかじめ決め
ている哲学カフェもあれば、当日参加者とともに決めるような哲学カフェもあ
る。議論することを前面に押し出した哲学カフェ、対話を目指した哲学カフェ、
どちらかといえばおしゃべりや会話に近いもの続ける哲学カフェなど、その
中身もさまざまである。自己紹介をしてから始める哲学カフェもあれば、あ
えて自己紹介をしない哲学カフェもある。カフェといっても場所が喫茶店に限ら
れるわけではない。

このように日本で行われている哲学カフェの特徴をひとつひとつ挙げ始めると
枚挙に暇がないが、それぐらい多様な活動や営みが同じ「哲学カフェ」とい
う名の下に日本で行われているのである。

3. 哲学カフェの意義

カフェ・デ・ファールの場合、サルトルの「実存は本質に先立つ」ではない
が「何のために哲学カフェを開くのか」という目的よりも先に哲学カフェが存
在していた。カフェ・デ・ファールでは誰かが目的をもって哲学カフェを始め
たのではなく、いわば自然発生的に、偶然の産物として出来上がったのであ
る。確かに、そこへ集まってきた人々のあいだには哲学者と議論がしたいとい
う明確な意図があったのかもしれない。しかしながら、哲学カフェを開く者の
意図がどうであれ、また哲学カフェに参加する者の意図がどうであれ、それら
とは独立に哲学カフェの意義を考えることはできるだろう。

⁴ 厳密に言えば哲学カフェの進行役と主催者（主宰者）は区別されるものであるが、これらは同一の者が兼ねている場合が少なくない。そこで本論文では哲学カフェの進行役と主催者（主宰者）を特に区別しないで用いている。

それでは改めて、哲学カフェにはどのような意義があるのだろうか。実は哲学カフェの意義を論じているものの中で、哲学カフェが市民性や公共性といった性質の涵養につながるという議論は少なくない。たとえば榎本直樹は哲学カフェがこれからの市民社会を支える徳の涵養につながるとして次のように論じている。

哲学カフェのような、世代の異なる人、意見の異なる人、見ず知らずの人同士が、ある時間と空間をともにし、そこで発した、あるいは発せられた「言葉」を素材とし、議論を交わす場所が社会の中にあり、その中で対話する態度を身につけていくこと、対話をつくっていくという感覚や経験を重ねていくことが、遠回りながらも、これからの市民社会を下支えしていくことにつながるのではないかと、とも思う。つまり、哲学カフェは、議論する市民社会の「手前」にある発声訓練の場のようなものなのである。こうした場が社会のあちこちに当たり前のよう存在すること。それが、これからの市民社会を支える徳の涵養につながっていくのである。(榎本 15 頁)

榎本によれば、哲学カフェの中で対話する態度を身につけることが市民社会を下支えすることにつながり、その哲学カフェが社会のあちこちに存在するようになれば、これからの市民社会を支える徳の涵養につながるという。そして彼は哲学カフェを「議論する市民社会の『手前』にある発声練習の場のようなもの」と形容している。人々が議論することを市民社会の重要な特徴として捉えれば、現状ではまだ市民社会には至っておらず、哲学カフェが議論する市民社会へ向けた地ならしになる、といったところだろうか。

東京で哲学カフェを主宰しているカント研究者の寺田俊郎は『「安全な」テーマ』で哲学カフェを楽しみながらも、そこでの対話によって「コミュニケーションを続ける感覚」が養われると論じ、これをカントにひきつけて『「理性の公共的使用」の涵養』と呼んでいる。

ふだん哲学カフェで「安全な」テーマで楽しんでいる対話にも、政治的な話題で

話すときにたんなる政治的討論に陥ることなくコミュニケーションを続ける感覚を養う面がある、と思っている。時代錯誤のそしりを恐れずに言えば、カントのいう「理性の公共的使用」の涵養。(寺田 33 頁)

ここで寺田が『『安全な』テーマ』と呼ぶものは、たとえば「幸福とは何か?」のように、鋭い価値観の対立や衝突を起こさない身近で日常的なテーマのことである。寺田はこのあとで「哲学的対話そのものの楽しさ、面白さなどの価値」⁵があるのでなければ、対話的コミュニケーションも長続きしないだろうとつけ加えている。

確かに、以上のような議論はもっともらしく魅力的なものである。私自身もかつて、哲学カフェに参加することは「自分とは違う者の存在に気づき、相手を思いやるきっかけになる」として、これこそが「公共的対話としての哲学カフェの意義」であると論じたことがあった⁶。

ところが、哲学カフェに多く参加していると、こうしたことが当てはまるのはごく限られた人にとってのみであり、哲学カフェに参加する人のほとんどは檜本の言うように「対話をつくっていくという感覚や経験を重ねて」いるようには見えないし、哲学カフェで現実の政治的な問題について話すときにも寺田の言うように「コミュニケーションを続ける感覚」が養われているようには見えないのである。これはどういうことなのだろうか⁷。

たとえば、どんな哲学カフェに参加しているときでも誰の発言に応答するときでも、発言の内容がほとんど変わらない参加者がたまにいる。こうした参加者は、テーマや話題が政治的なものであるときには特に多いように思われる。私も含め、哲学カフェによって参加者に何がしかの変容が起こることを期待する者は少なくないが、そのような変容が現実にかかるのは、特に仕掛けがあるわけではない普通の哲学カフェにおいては、ごく稀なことなのである。

⁵ 寺田 33 頁。

⁶ 森本 42-3 頁。

⁷ 哲学カフェは誰もが自由に参加できるという性格上、参加者の経験にばらつきがあるという点は考慮しなければならないだろう。

つまるところ哲学カフェの参加者は、その消費者で終わっていることがほとんどなのである。これは見方を変えると哲学カフェそのものが消費されるコンテンツとして提供されているからだと言えるかもしれない。ここでコンテンツというのは、寺田の言う「哲学的対話の快樂」を含み、さらにもっと広く、哲学的対話が起きている場所に居合わせることから生じる快樂をも含むものである。

楽しい哲学的対話の場、すなわち哲学カフェがまちの至るところで開催されているというのは一見するとこれからの市民社会にとって理想的な状況のように思われるかもしれないが、現在のように哲学カフェがただ消費されるだけのものとしてあり続けるならば、待ち構えているのは他者を認めず対話の成り立たない人々ばかりが住まう社会であり、樫本の想像するような市民社会からはほど遠い社会に違いない。哲学カフェに参加すれば対話ができるようになるとか公共性が身につくとかというのは、哲学カフェやその参加者に対して投影された私たちの過剰な期待なのではないだろうか。

それでは、哲学カフェに市民性や公共性といった性質を涵養する役割を期待することはできないのだろうか。ここで私たちは人々がなぜ哲学カフェに参加するのかという動機に注目してみたい。哲学カフェに参加することで参加者自身に何らの変容が起こらなかったとしても、人々が哲学カフェに参加し続けるということは、誰かに参加を強要されているのでもない限り、参加者自身が哲学カフェを楽しんでいるからではないだろうか。それならば、哲学カフェを開き、運営する側にまわってもなお楽しいと感じられるのだとしたら、どのようなことが起こるだろうか。次節ではこの問題についてパブリック・エンゲージメントという概念を導入し検討してみたい。

4. パブリック・エンゲージメント

パブリック・エンゲージメント (public engagement) とは、一般には公衆関与あるいは公共的参加などと訳される英国から広がってきた概念である。これは大学のような高等教育機関、あるいは美術館、博物館といった公共施設

が、公衆たるパブリックに対してもっと関与していくべきであるという概念である。私はこの意味をもう少し広げて、パブリック・エンゲージメントは公衆の側も公共的（パブリック）な問題に対して関与していくべきであるという意味を含むものとして理解している。そこで本論文では、パブリック・エンゲージメントが「公衆・公共への関与」を意味するものとして使用する。

私は2011年9月に英国でパブリック・エンゲージメントの研究調査を行った経緯から、翌10月に大阪大学でパブリック・エンゲージメントの研究グループを立ち上げた。当初は大学の外から参加者を受け入れる形をとり、授業期間中はほぼ週に1回のペースでミーティングを行っていたが、私が大学を離れるのに伴って、2013年4月からはミーティングの場所を大学の外へ移し、喫茶店を転々としながら市民とともに、今度は大学から参加者を受け入れる形へと発展させてきた。

ミーティングに出席する者の多くは哲学カフェに参加した経験をもっているが、それは哲学カフェの参加者を中心にパブリック・エンゲージメントの活動について案内してきたからである⁸。

ところで、私たちがパブリック・エンゲージメントのミーティングで話し合っていることは、どうすればパブリック・エンゲージメントを促進できるだろうかということであり、これはただ受動的に哲学カフェに参加するのとは異なっている。パブリック・エンゲージメントを進めていくために新しく哲学カフェを始めようとか、それではどのような哲学カフェにすればパブリック・エンゲージメントの促進に寄与するのだろうかといったようなことを考えなければならない。哲学カフェに対して〈主催者と参加者〉あるいは〈生産者と消費者〉といった単純な構図を当てはめることは極力避けたいが、パブリック・エンゲージメントの立場から哲学カフェに関わるということは、哲学カフェをただ消費するだけの受動的な立場から、哲学カフェを自ら企て創造・生産するという積極的・主体的な立場に立つということ、あるいはそういう覚悟をもつと

⁸ 哲学カフェに参加する人々のなかには、市民的特性やその萌芽を見出しうのではないかという期待があったことは事実である。ただし、このような期待をすることが、哲学カフェに参加しない人々への消極的な評価へとつながらないよう注意しなければならないだろう。

いうことを意味している。もちろん、哲学カフェを企て創造・生産する者が消費する者よりも優位であるなどということを行っているわけではない。ここでは、どういう立場や態度で哲学カフェに関わるのかという違いを言い表しているだけである。

以上のことを一般化すれば、パブリック・エンゲージメントの観点から哲学カフェに関与するということは、どうすれば私たち自身を含めて人々は社会の問題へ関心をもち公共的なことがらに関与するようになるだろうか、どうすれば大学や公共的な組織は公衆に関与するようになるだろうかということを中心的に考えるということなのである。

では、どうすれば受動的に哲学カフェに参加していただだけの者が自ら哲学カフェを企て、ひいては社会の問題を自分自身の問題として引き受けられるような市民性、公共性を涵養できるのか、次節で検討してみたい。

5. 企てながら楽しむこと

もし哲学カフェに寺田が言うような「哲学的対話そのものの楽しさ、面白さなどの価値」があるのだとすれば、そこでの「楽しさ、面白さなどの価値」⁹は、参加者として対話に加わるのであれ、進行役として対話に加わるのであれ、根本的な違いはないはずである。それはトランプでゲームをするときに、親になるのか子になるのか、人によって好き嫌いの好みはあるにせよ、ゲームそのものを楽しむという点において違いがないのと同様である。それならば、新たに哲学カフェを企てて自ら進行役を務めてみてはどうだろうか。

パブリックなものとして開かれる哲学カフェは誰もが自由に参加できるものであり、参加者同士の関係も対等であることが保障されている。したがって、もし参加者のうちの誰かが「今日の哲学カフェはつまらなかった」と言ったとすれば、その批判はそのまま自分自身へ跳ね返ってくることになる。というのも、もし参加している哲学カフェがつまらないと思えば、面白いと思えるように自ら変えていく自由がすべての参加者には与えられているからである。とこ

⁹ 寺田 33 頁。

ろが、哲学カフェを誰かから与えられ、たんに消費するためのコンテンツとしてしか考えていない参加者は、そうした関係を認識することができず、常に受動的であり続けるのである。

ここでもし進行役を体験してみれば、以上のような意識が参加者のあいだでなかなか共有されないことを実感できるだろう。またそれだけでなく、ほんらい対等であるはずの参加者から、すなわち哲学的対話の面白さを実現していく上で共同の責任を負っているはずの参加者から「この哲学カフェはつまらない」「何とかしろ」という不当な批判・要求を差し向けられることになるだろう。

私たちは哲学カフェを企て進行役を演じることによって、その哲学カフェをよりよいものにするための役割をも同時に引き受けるきっかけを得るのである。まずその足がかりとして哲学カフェの進行役を体験することは、たんなる受動的な参加者の視点から離れ、参加者を対象として見ることを可能にし、結果として自分自身のふるまいを反省する契機ともなるのである。

6. 結語にかえて

私が初めて哲学カフェに参加したのは2008年4月のこと、進行役を初めて体験したのは2009年9月のことであった。このときはまだ誰かに誘われて進行役を務めるだけであり、もっと積極的・主体的に哲学カフェに関わり始めたのは2010年10月、京阪なにわ橋駅構内にあるアートエリアB1で行った「クジラを食べてもよいか？」からである。いまふり返ってみてもどうして私が哲学カフェに積極的・主体的に関わっていこうと思ったのか思い出せないが、誰かから進行役に誘われることがなければ、私にとっての哲学カフェはいまでもずっと受動的に参加するだけのものであったかもしれないし、そのうち哲学カフェにも飽きて参加しなくなっていたかもしれない。まして当時の研究のテーマであった捕鯨について自ら哲学カフェを企画するようなこともなかったであろう。

これまで、社会の問題に対して消極的・受動的にしか関わってこなかった

人々が、どうすれば市民性や公共性といった徳を涵養して積極的・主体的に関わるようになるのか、哲学カフェとの連関で考察してきた。その結果、市民性や公共性といった徳を涵養するためには、ただ哲学カフェに参加するだけでは不十分で、哲学カフェが公共的な対話としてそこに関わる者すべてを巻き込んだ共同のいとなみであることを認識する必要がある、それには哲学カフェを自ら企て進行役を務めることが有効であると論じてきた。その契機となるのがパブリック・エンゲージメントという考え方であり、その考え方に基づいた活動であった。

パブリック・エンゲージメントの観点から哲学カフェを企て運営していくことは、幾何学の問題を解くときに補助線を引くようなものである。補助線を引くことで問題の見え方が変わり答えを見つけやすくなるかもしれないが、補助線によって答えそのものが明らかになるわけではない。補助線はあくまでも問題を解く者が答えを見つけ出すための手助けをするものであり、答えそのものは自らの手で探し出さなければならないのである。

パブリック・エンゲージメントは人々が哲学カフェを通じて市民性や公共性といった徳を涵養する上で補助線のようなものとして機能するのかもしれないが、それだけなのである。人々が現実に社会の問題を自分自身の問題として引き受け、消極的・受動的な立場から積極的・主体的な立場へと身を移すためには、そうしようとする覚悟がなければならず、この覚悟そのものはパブリック・エンゲージメントによっては与えられないのである。残念ながらこの覚悟がどのようにして獲得されるのか、まだ十分には考察できていない。この問題を今後の課題として本論文の結びにかえたい。

参考文献

- ・ 榎本直樹（2014）「哲学カフェにおける徳の涵養—喫茶 JUN（神戸）の場合」 鷲田清一監修、カフェフィロ [CAFÉ PHILO] 編『哲学カフェのつくりかた』大阪大学出版会、3-15 頁
- ・ 越門勝彦（2014）「哲学の共同実践としての対話—『哲学カフェ』の意義に

ついでの一考察—』『人文社会科学論叢』第23号、35-45頁、宮城学院女子大学人文社会科学研究所

- 寺田俊郎（2014）「ガラパゴス化する『東京哲学カフェ』？—哲学カフェの進化とは何か」 鷺田清一監修、カフェフィロ [CAFÉ PHILO] 編『哲学カフェのつくりかた』大阪大学出版会、17-33頁
- マルク・ソーテ（1996）『ソクラテスのカフェ』（堀内ゆかり訳）紀伊國屋書店
- 森本誠一（2013）「公共的対話としての哲学カフェ」『HUMANITAS』第38号、35-46頁、奈良県立医科大学